

上田市政継承掲げた秋元氏が当選 「顔の見える市政」築けるかが課題に

小倉 敦

四月一二日投票の札幌市長選は、新人五氏の争いになり、民主党、維新の党推薦で元副市長の秋元克広氏（五九）が、自民党推薦で元総務省自治大学校研究部長の本間奈々氏（四六）らに完勝した。今回の統一地方選で政令指定都市では唯一の「自民・民主対決型」として注目され、当初は接戦も伝えられたが、一三万票以上の差が付いた。秋元氏は民主党・連合と経済人が終盤に結束し、知名度の高い上田文雄前市長（六六）の支援を得て無党派層も取り込んだ。一方、本間氏は自民党内の足並みが最後までそろわず、四年前に続く再挑戦は実らなかった。

上田氏の応援追い風

秋元氏の当選確率は予想以上に早かった。投票が締め切られた午後八時すぎには報道各社が当確を報じ、選挙事務所は喜びと歓声に包まれた。秋元氏は「行政経験、安定感に期待をいただきたいと思う。加えて、財政運営をしっかりやってほしい」と言う声が多かった」と勝因を分析。上田前市長や後援会共同代表の横山清アークス社長らが

駆けつけ、新市長の誕生を祝福した。

昨年九月に出馬表明して以降、各種世論調査で優勢が伝えられた秋元氏だが、当初、陣営の動きは鈍かった。民主党札幌幹部は「世論調査でいい結果が出るので、緩んでしまっていた」と振り返る。

秋元氏に出馬要請した経済人には、選挙対策本部長を務めた加藤欽也昭和交通社長ら、もともとは自民党を支持していた有力者も多い。実動部隊を担う民主党・連合が表に出ることを嫌う空気もあった。

民主党市議や道議の政党ボスターに秋元氏の写真を使うことさえ、当初は経済人側が難色を示し、有権者の知名度はなかなか高まらなかった。結局、民主党がしびれを切らず形で年明けに秋元氏の推薦の方針を決め、経済人側も受け入れた。

秋元氏自身は年明けから、同党市議や道議の会合に頻繁に出席。民主党・連合が同党支持層を固めた一方、経済人は保守層や公明党対策などを担い、民主党側との「役割分担」がようやく機能し始めた。

さらに大きかったのが、三期一二年での引退を

表明した上田前市長の全面支援だ。秋元氏は市長政策室長などとして上田市政を中枢で支えており、上田氏はもともと秋元氏を応援する考えだった。

当初は上田氏の「民主党・リベラル色」を敬遠する経済人への配慮もあって、表に出ることを避けていたが、年明けに「札幌を担えるのは秋元さんしかない」と秋元氏を事実上の後継に指名。告示後は「一二年間ありがとう」と書いたたすきを着け、連日のように秋元氏の応援演説に立つた。秋元氏も上田市政の継承を前面に打ち出すことで、安定感をアピールした。

北海道新聞社の投票票日の出口調査では、秋元氏は民主党支持層の八割以上を固め、無党派層でも本間氏を上回る約五割を獲得。公明党支持層でも三割を超え、本間氏を推薦した自民党支持層も三割近くが秋元氏に流れた。

中でも、完勝の原動力となったのは、無党派層の動向だ。北海道新聞社が投票日の約一週間前に実施した世論調査では、無党派層の秋元氏への支持は三割超。秋元氏は、選挙戦後半でさらに無党派層の取り込みにも成功したとみられる。

選挙戦を通じ、市職員出身の秋元氏にとっては、特に無党派層への知名度不足が課題となっていた。知名度の高い上田氏が全面支援したことも、無党派層を取り込む力になったようだ。

共産党は今回、告示後に運動を中止した二〇〇三年六月の再選挙以来の公認候補を擁立したが、出口調査では同党支持層の四割近くが秋元氏に流れ、秋元氏にとっては大きな不利にならなかった。

足並みの乱れ致命傷

敗れた本間氏は、推薦を受けた自民党内や経済界の足並みの乱れが致命傷だった。

本間氏は前回二〇一一年の市長選でも自民党の推薦を受けたが、三選を目指す上田氏に約一六万票差で敗北。早々に再挑戦の決意を固め、同党札幌支部連合会（札幌連）の推薦を目指した。

本間氏は札幌連の推薦候補選考に臨んだものの、昨年一月には経済界有志が当時副市長だった秋元氏の推薦を札幌連に要請。当時札幌会長だった橋本聖子参院議員（比例代表）らも、秋元氏支持に傾いた。

そこへ町村信孝前衆院議長（衆院道五区）らが「上田市長の側近を自民党が擁立するのは自殺行為だ」と待ったを掛け、札幌連は本間氏推薦を決定。この選考の混乱の責任を取る形で、橋本氏は会長を辞任し、経済界の支持も分裂した。

町村氏の働きかけで、経済界を束ねる札幌商工会議所の政治団体、札幌商工連盟は本間氏の推薦を決めたものの、党内や経済界には本間氏の行政手腕への疑問や、町村氏らの強引な候補決定への不満がくすぶった。

今年二月には、橋本氏が民主党推薦の秋元氏の後援会事務所に、激励の張り紙「為（ため）書きを送ったことが判明。橋本氏に近い森喜朗元首相や溝手顕正党参院会長も書きを秋元氏に送り、党内の足並みの乱れは決定的になった。

また告示前には、自民党が国政で連立与党を組む公明党が、市長選の自主投票を決定。自民党本部は札幌市長選を重点選挙と位置付けることをせ

ず、不利な情報が流れるたびに推薦候補差し替え論が浮上した。こうして、本間氏は政権与党から推薦を受けている強みを生かすことが出来なかった。

選挙戦では「上田市政からの転換」を訴え、巻き返しを図ったが、序盤のもたつきの影響は大きく、上田氏の全面支援を受けた秋元氏に逆に水をあけられた。

変化より安定を選択 道都札幌の課題

開票の結果は、秋元氏四五万三四九三票对本間氏三一万六八二九票で、一三万六六六四票差。双方の陣営が「想定以上」と驚く差がついた。投票率は58・75%で、東日本大震災直後だった前回を0・21ポイント上回ったが、戦後四番目の低さだった。

この結果は、有権者が市職員三五年の経験と上田市長の後継を打ち出した秋元氏を、積極財政による市政の転換を訴えた本間氏よりも支持した形だ。札幌市民が急激な変化よりも、市政継承と安定感を支持したことを物語る。

秋元氏は五月二日に新市長に就任したが、課題は山積している。最も大きいのは、右肩上がりの成長を続けてきた札幌が、まもなく戦後初の人口減少局面を迎え、高齢化も加速することだ。

秋元氏はまず、肉付けの補正予算で、観光予算を当初予算から倍増する方針。経済活性化や企業誘致で若者の流出に歯止めをかけるほか、保育所の待機児童解消などに力を入れる考えだ。高齢化対策では、自立して生活できる「健康寿命」を延

ばす予防医療の推進などを目指している。

ただ、札幌市内では老朽化した市有施設が一斉更新の時期を迎える。昨年立候補を表明した二〇二六年冬季五輪・パラリンピックが実現すれば、新たな施設整備が必要となり、財政運営はさらに厳しさを増す。

また、上田氏の全面支援や保守分裂選挙の影響を懸念する声もある。上田市政の単なる継続や、保守陣営を含めた多方面への配慮は、あいまいな「顔の見えない市政」に陥る可能性もあるからだ。

堅実さが持ち味で、調整型とされる秋元氏。上田市政では冷え込みがちだった道との関係強化に向け、冬季五輪招致に向けた協議体の設置を呼び掛けており、初登庁翌日の五月八日には高橋はるみ知事と会談して、関係改善をアピールした。同一日には安倍晋三首相とも会談し、政権与党とのパイプづくりにも腐心している。

全道の人口の三分の一以上が集中する札幌市のトップの意向は、北海道全体の動向にも影響を与える。人口減少で他市町村が疲弊する中、札幌が果たす役割への期待は大きい。

発信力や指導力などを発揮し、「顔の見える秋元市政」を実現できるのか。上田市政が排除を目指した「役所の論理」が、復活することはないのか。一二年ぶりに誕生した市職員出身市長の手腕が問われることになる。

へおぐら あつし・北海道新聞報道センター記者